



今月のひまわり画像—2023年4月

北海道から九州で観測された大規模な黄砂

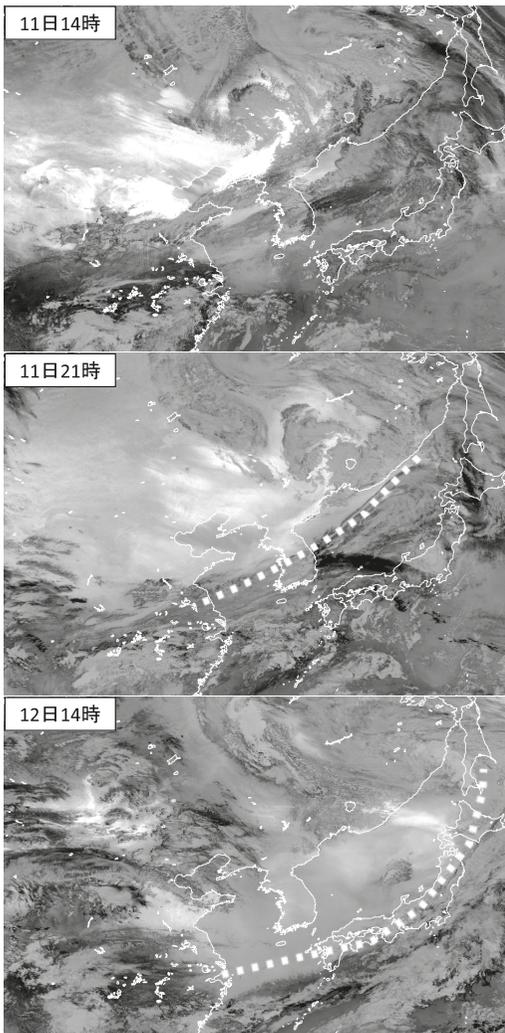
2023年4月12～14日、日本で広く黄砂が観測された。第1図は、11日の14時（日本時間）、21時、12日14時の日本付近における赤外差分画像（以下、差分画像）である。差分画像は、黄砂や火山灰を含む噴煙の検出に有効で、11日14時の差分画像で中国大陸でより白く見える領域が、大気中へと巻き上げられた砂塵を含む

領域である。同日09時の時点で、華北や中国東北区で視程が2 km 未満の黄砂が観測された。同日21時の差分画像では、白破線付近まで明るい灰色の領域が見られ、大陸沿岸から日本海へ黄砂が広がりながら移動してくる様子がわかる。12日になると、沿海州付近に500hPaにおけるトラフが進み、その前面で吹く南西風によって、上空数 km まで巻き上げられた黄砂が北海道付近へ進んだ。12日14時の差分画像では、日本海北部から渡島半島付近に達する明るく白い領域は、黄砂の層が厚いと考えられる。一方、11日21時で日本海西部から黄海付近まで到達していた黄砂は12日には東～東南東へ広がり、日本の広い範囲で黄砂の領域が確認できる。

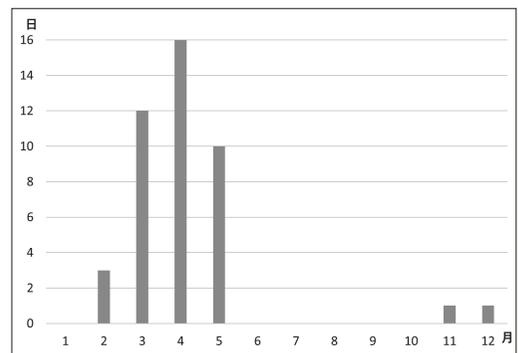
日本国内では、11地点の気象台で大気現象の目視観測が行われているが、12日から14日にかけて、北海道から九州までの10地点で黄砂が観測された。東京でも2年ぶりに黄砂が観測され、4月としては2007年以来の観測となった。東京で1967年以降に黄砂が観測された日数を月別に集計すると（第2図）、4月が16日と最も多い。春には偏西風が日本上空を通過することから、黄砂粒子が日本へ飛来しやすい。黄砂の月別観測日数平年値は、3～5月が多くなっている。さらに黄砂は偏西風によって、太平洋を横断して北米大陸へ運ばれるものもある。

黄砂を監視できる画像として、差分画像のほかにトゥルーカラー再現画像やダスト画像がある。どちらも黄砂領域が視認しやすく、気象庁ホームページで黄砂解析予想図と共に利用できる。

（気象庁大気海洋部予報課 河野麻由可）



第1図 4月11日14時（日本時間）～12日14時の日本付近における赤外差分画像。白破線は黄砂が広がっている最前線を示す。



第2図 1967年以降東京で黄砂を観測した月別日数。